

話 題

放射線教育に関する国際シンポジウムの報告と印象

金沢大学理学部化学科

中西 孝

昨年12月11日(金)から14日(月)の間、放射線教育フォーラム(以下、フォーラム)が、日本工学会・日本原子力学会など9学会との共催、日本アイソトープ協会・日本原子力研究所など6組織の協賛、文部省・IAEAなど5機関の後援、国際観光振興会の協力により、標記シンポジウム(International Symposium on Radiation Education: ISRE98)を、湘南国際村(神奈川県葉山町)の生産性国際交流センターで開催した。出席者の大部分が同センターに宿泊する合宿型のシンポジウムであった。

この国際シンポジウムは、フォーラムが設立された当初(1994年4月)から計画され、キュリー夫妻によるラジウム発見100周年という記念すべき年に開催されたものである。

1 ISRE98の背景と目的

フォーラム設立の経緯や活動の一端は各種学協会誌などを通じて広く紹介されてきているが、いま一度その設立の主旨などに簡単にふれながらISRE98の目的を、まず説明しておきたい。

ラジオアイソトープ・放射線と原子力の利用が拡大する中で、放射能・放射線に関する正しい理解が学校教育の現場や一般社会では進んでいないのが実状である。このような現状を改善するために、放射能・放射線・原子力に関係する研究者や学校教育に携わる者が協力し合い、特にこれからの社会を担う青少年に対して、放射能・放射線に関する正しい知識を普及しようという主旨でフォーラムが設立された。

設立後、今日に至るまでの約5年間、研究会などの開催やニュースレターなどの発行も行いながら、主旨達成のための活動を繰り返してきている(現会員数は約190個人・団体)。放射能・放射線教育に関心があれば誰でも入会でき(年会費は個人2千円、団体1口2万円)、フォーラム事務局(TEL/FAX 03-3591-5366)で随時入会受付を行っている。

このような教育活動を効果的に進めるためには、国際的にも視野を広げて最新情報も不断に取り入れ

る必要がある。そこで、今回の国際シンポジウム開催となった。多様な職域から出席者を募る国際シンポジウムは、発足後の日も浅いフォーラムにとって初めての大事業であった。

2 シンポジウムの概要

さて、実際にシンポジウムの幕が開いてみると、以下に報告する通りの盛会であった。

初日(11日)は夕方前から受付が始まり、国内の中学・高校・大学・研究機関などからの出席者140名余と海外15か国からの出席者22名のほとんどが登録を済ませ、プログラムと要旨集及び名札などを受け取った。そして夕食後、有馬朗人文部大臣(フォーラムの初代会長)を囲んで、なごやかにレセプションが開かれた(写真)。2日目と3日目(12日、13日)はシンポジウムの本題の部分にあてられ、セッションの大部分は同時通訳付きの大会議場で行われた(ポスターセッションは別会場、ワークショップは3会場での分科会形式)。

まず、伏見康治組織委員長(フォーラム現会長)の開会の挨拶があり、科学技術の正しい利用・発展のための教育の重要性が述べられた。ついで有馬文部大臣の挨拶があり、具体的な調査データを示しながら理科教育のあり方について述べられた。



写真 有馬文部大臣を囲む参加者

その後、プログラムに従い2日間にわたってセッションが進行した(表、詳細は会議録として1999年10月に刊行された)。8題の招待・依頼講演(解説付き代読1題を含む)は、どちらかといえば放射線教育に携わる者に対する教育的な意味合いのものであった。放射能・放射線・エネルギーに関する高度の研究や教育経験に基づいた含蓄のある講演は、筆者にとって放射線教育の奥行きを深める上で有意義であった。しかし、ラドン温泉を危険視する傾向があるドイツの情報をと期待していた講演が取り消しになったのは残念であった。

トピカルセッション、パネル討論、ワークショップでは率直な議論が交わされ、このことは大きな収穫であったと感じた。なお、先進国のなかでイタリアだけが原子力発電を行っていないという報告があったが、イタリアにおける放射線教育についてもっと詳しく調べてみたいと感じた。

2日目の夕食後から始まったポスターセッションでは、工夫を凝らした教育実践例や演示が多数発表されて、夜10時近くまで質疑応答が続いた。一般社会や児童・生徒向けに各地で放射線教育のボランティア的活動を行っている方々の生き生きとした発表は感動的であった。

会期中は展示会場も併設され、最新の放射線教育機器に関する情報も豊富であった。全体を通じて、いずれのセッションも、もっと時間が欲しいと感じるくらい内容的にも充実したシンポジウムであった。

3日目の夕方には会場を海辺のレストランに移し、盛りだくさんのご馳走を囲んで賑やかに懇親会が行われ、実り多かった今回のシンポジウムの議論の続きや、次回開催への期待などに話の花が咲いた。

4日目(14日)には見学会が行われ、(財)電力中央研究所横須賀研究所と立教大学原子力研究所を、約30名で訪れた。

3 強く印象に残った言葉

放射能・放射線関係の教育に携わる者として念頭に置いておきたいと筆者個人の心に残った会期中の言葉のいくつかを順不同で箇条書きにして報告と印象記のしめくくりとする。

- ・正しく教育することが第一で、ごまかしや隠しごとなどがあってはならない。
- ・この小惑星・地球に、本当に無尽蔵で存在するといえる資源はない。

- ・国民の眠っている能力を起こすために、まず正確でやさしい教育が必要である。
- ・日本の原子力利用は、最初から、いろいろな問題を粘り強く解決し、核兵器廃絶の努力をしながら成長してきた。
- ・リスクとは避けるべきものではなく、必然的に存在するリスクに直面し、克服することで文化が発展する。

表 ISRE98のセッション

第2日目(12月12日)

◆招待講演

- ・ラジウムの発見と初期の原子核研究に及ぼした大きなインパクト
J.P. Adloff (フランス)
- ・放射能に関するキュリーの仮説と化学元素の起源
P.K. Kuroda(アメリカ)
- ・天然放射線・放射能の教育
阪上 正信
- ・医学における放射線・放射能の最近の利用
佐々木 康人
- ・原子力科学技術の社会への貢献
松浦 祥次郎

◆トピカルセッションー1

- 「低レベルの放射線の影響をいかに理解し教えるか」
- ・電離放射線の生物影響に関する最近の知見:低線量データを中心に
山田 武
- コメント:低レベル被曝の死亡率への影響
—長崎原爆被曝者のデータから—
三根 真理子

◆パネル討論会

- 「諸国における放射線教育の現状と課題(1)」
(5カ国からの報告と討論)

◆ポスターセッション

(28件)

第3日目(12月13日)

◆パネル討論会

- 「諸国における放射線教育の現状と課題(2)」
(8カ国からの報告と討論)

◆招待講演

- ・地球温暖化と原子力
P.E. Hodgson(イギリス)

◆トピカルセッションー2

- 「一般社会への放射線・核問題教育」
- ・核問題の社会教育について
G. Marx(ハンガリー)
- コメント:核科学リテラシー
E. Toth(ハンガリー)

◆ワークショップ

- A:放射線教育カリキュラム (基調講演・話題提供6題と自由討論)
 - B:放射線教育のための実験及び演示 (基調講演・話題提供5題と自由討論)
 - C:リスク教育及び社会教育 (基調講演・話題提供4題と自由討論)
- ワークショップの要約(全体会)

(本稿は、(社)日本アイソトープ協会 編集・発行 ISOTOPE NEWS, 1999年4月号, MONITORING POST 欄に寄稿した記事に補筆などを施したものである。)